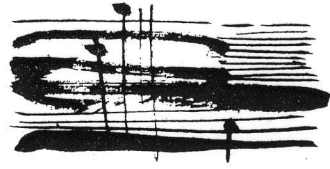


展 望



山元 眞

イエスの望み

子どものかかわりについては、イエスのはっきりした望みがある。みことばそのものをまず聴いてみたい。「イエスに触れていたがために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた、『子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのようなおく。子供のように神の国を受け入

れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。』そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された(マルコによる福音書十章)。

また、次のようにも言われている。

「一行はカファルナウムに來た。家に着いてから、イエスは弟子たちに『途中で何を議論していたのか』とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人

を呼び寄せて言われた。『いちばん先にな

子どものかかわり

りたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。』そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。『わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。』(同九章)。少々引用が長くなったが、ここには子どもたちのかかわ

りについての神、イエスの望みがはっきりと示されている。

泣く子どもだまる

教会での子どもの受け入れはどのようなものだろうか。教会で、人々は、どのように子どもたちのかかわっているのだろうか。何度もイエスのことばを読むといろんなことに気付かされる。このままではいけないことに気付かされる。子どもを連れ

人にとつてはいい雰囲気？ しかし、母子室の中の状態はどんなものだろうか。子どもたちは自由に行き来し、あめを食べ、ゲームをする。祈りどころではない。

幼児も子どもも祈ることができるし、イエスに触れていたが、ことができる。それは、単に聖体拝領の時に部屋から出て列に加わり、祝福をいただくことだけではない。子どもは雰囲気から学ぶ。祈りの雰囲気の中

で、子どもは祈りを学ぶことが出来る。そして、その

のためには、信徒が心から祈ること、待つ忍耐が必要である。祈りの雰囲気の中では、泣く子どもだまってしまつ。

泣く子ども歌う

2歳にもならない子が聖歌を歌う。ミサの時だけでなく、家庭でも不意に聖歌が口をついて出る。3歳にもならない子が、ミサ中に司祭の祈りの動作のまねをする。祭壇に近づき、司祭に「はい」に「はい」とい

うサインを送る。5歳になったばかりの子が「親元」を離れて一人で一番前の席に着くようになる。周りを見ながら聖歌集を開き、歌い、「聖書と典礼」のパンフレットのテキストを目で追う。

ミサに参加している誰もが、子どもを受け入れねばならない。隔離してはいけない。温かいまなざしを送らねばならない。騒ぐから、うるさいからといって排除してはならない。イエスが触れる機会を奪ってはならない。子どもの親に対してもそうである。

子どもの立場になる

子どもとかわるためには、子どもの立場に自分を置いてみる必要がある。私たち大人も、かつては子どもであった。子どもは大人ではない。子どもは日々成長していくものである。成長するためには時間がかかる。ただ成長するのを待つのではない、愛で包みながら待つのである。愛は人を愛え、人を成長させる。

(福岡教区司祭)